

新美南吉記念館だより

NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM NEWS

発行 新美南吉記念館 〒 475-0966 愛知県半田市岩滑西町 1-10-1 TEL0569(26)4888 <http://www.nankichi.gr.jp>



第30回 新美南吉童話賞表彰式

- ①集合写真 (受賞者と来賓の方々)
- ②表彰状授与 (半田市教育長から小林貴弘さんへ)
- ③審査員の先生による受賞者への個別講評

二月二十三日(土)、
新美南吉記念館会
議室で、第三十回
新美南吉童話賞表彰式を行
いました。

今年の応募総数は一九四
七点です。表彰式では、そ
の中から選ばれた十九名の
受賞者へ、主催・共催・後
援団体と協賛企業が、賞状
を手渡しました。

その後、特別審査員の藤
田のぼる先生より、今回の
童話賞全体の講評をいただ

きました。講評では、昨年の『赤い鳥』創刊百年に触れ、同誌がなければ南吉も投稿をせず、こうして童話賞が三十回の節目を迎えることはなかったかもしれない、と振り返られました。

また、最優秀賞を受賞した小林貴弘さんと、オマージュ部門大賞を受賞した高木月さんからも、ご挨拶をいただきました。それぞれ、作品を思いついたきっかけや、今の気持ちなどを話され、緊張の中にも受賞の喜びが伝わってくるスピーチでした。

そして、式の最後には小林さんの作品「交換日記」と、高木さんの作品「風花」を、それぞれ「南吉童話お話の会でんでんむし」と「きりんの会」の方が朗読しました。朗読が始まると、参加した方々は、今回の受賞作品を収めた作品集『赤いろうそく』を見ながら、一文一文しっかり聴き入っていました。

この『赤いろうそく』は記念館で販売しています。通信販売もありますので、お求めの方は記念館のHPをご確認ください。

受賞者へのインタビュー

自由創作部門最優秀賞を受賞された、小林貴弘さんにお話を伺いました。



—受賞の連絡を受けた時、どう思われました？

初めは普通に対応をして電話を切りました。その後表彰式の日程をメモろうとした時に、手がぶるぶると震えていたので、「ああ、受賞したんだな」と。頭と体がずれていましたね。

—お話を書くようになってから長いのですか？

こういう公募があるということを知ったので、十三年くらい前から、遊び半分に始めました。最初は冗談で、嫁さんに「賞金で家を建てちゃおう」なんて話をしたりしていました。南吉童話賞に送るようになってからは、十年以上経っていると思います。

—何かに応募しようとしたのがきっかけだったと。では、何故文学の方向に？

文章を書いて送るのは、切手と紙だけでお金がかからないですし、通勤途中にも出来るので、長続きする理由になりました。ただ、やればやるほど落選が続き、文章を書くことの難しさが出てきて…。それでも、私が書いて送ることに何の害もないので、自信はないけどどおりあえずやってみよう、と続けてきました。

—継続は力なりですね。そうですね、ずいぶんかかりましたが（笑）。

—今回の作品はどうやって思いつかれたのですか？

娘が交換日記をしている姿が本当に可愛くて、その可愛さというか、漠然とした気持ちがお話にならないかと考えました。私は介護の仕事をしているので、お年寄りと接する機会も多く、それでばっと思いついたのかも知れません。

—書くときに気を付けていることはありますか？
私は本当は活字を読むとお腹が痛くなるタイプなんです。ボキャブラリーがな

くて。でも、逆に小学六年生くらいの言葉で書くようにすることで、自分も操れるし、読む対象も子どもになるので、わかりやすく書けるのかなと。

—最後に、今後の抱負があれば教えてください。

落選続きで、十年間何も進歩していないように感じていましたが、今回こうして評価されたことで自信が出ました。これからは想像力を自由に発揮して、ライフワークみたいに続けていけたらなと思います。

*

オマーージュ部門大賞を受賞された、高木美月さんにお話を伺いました。



—二年連続での大賞受賞となりましたが、今の気持ちをお聞かせください。

今年も受賞できるとは思っていませんので、驚きの方が大きいですけど、

嬉しいです。電話をとったお母さんから「受賞したよ」って聞いたときは、思わず笑っちゃいました。

—昨年に続き、天気がテーマの一つでした。

三年生の時に買ったもらった漢字辞典をめくったら、ちょうど「風花」という文字を見つけたんです。その時は「ふうか」としか読めなくて。お母さんに聞いたら、「かざはな」と読むんだよって言われたので、「素敵な言葉だな」と思って、今回の題にすることにしました。

—小学三年生で漢字辞典を買うのがすごいですね。

お母さんが買ってあげるよって勧めてくれたので。ミッキーがついているかわいいやつです（笑）。おばあちゃんちで宿題をやることも多いので、自分の家とおばあちゃんちに一冊ずつ置いてあります。

—課題作品に「のら犬」を選んだのは何故でしょうか？

私は猫が好きで、のら猫はよく見るんですけど、のら犬って見かけないですね。それで「のら犬」に興味を持ちました。

—ファンタジーな作品はあまり書かれないのですか？

頭の中ではたくさん考えていて、お母さんによく話します。それで、お母さんと、あと習い事の先生にも、「美月ワールド」とか言われています（笑）。来年のお話は、生活の中に魔法があつたらとか、そういうちよつと思議なものにしようかなと思っています。

—どういう時にお話を書こうと思いますか？

うーん…。学校の課題で書くこともありますし、普段から思っている不思議なことを書いてみたいな、という時も。あんまり書くことと話すことをわけていたりしないです。

—お話はいつもオチから考えていますか？

書きながら考えるときもあります。今回は「風花」って聞いたときにびっくりして、書いているうちに意味が分かってきました。

—最後に、これからの目標があれば教えてください。

今すぐではないですけど、将来自由創作部門の最優秀賞をとってみたいなと思っています。

南吉とわたし ②0 歌手 高居 洋子



もう何十年も前のことですが、私は南吉さんの故郷岩滑で育ちました。父は初め半田の港の方に住んでおりましたが、伊勢湾台風にあつて家がひどく浸水したので、結婚する前に岩滑小学校の南の小高い土地に引っ越して来たそうです。その高台から小学校の先に目をやると「ごんぎつね」の兵十が鰻を捕った矢勝川と、ごんが住んでいたという権現山が見え、時折農学校の牛や鶏の匂いも漂うのどかな所でした。

南吉さんが岩滑の人だったと意識したのは小学校低学年の頃「この教室で南吉さんは、先生をしていました」と聞いた時だったかと思います。その頃の岩滑小学校は校門入ってすぐ右手に木造の講堂があり、その隣に鉄筋校舎、その奥に南に向かって三棟の木造校舎が建っていました。そのどれがそうだったのかは記憶が曖昧なのですが、幼なじみで同級生の T 君は南吉研究者大石源三先生の息子さんと、源三先生にも何回かお会いした記憶があります。にこにこ笑顔の素敵なお優しい先生でした。小学校の校外学習で南吉さんの生家や新田の養家に行ったりもしました。授業で「ごんぎつね」を習った時は「岩滑出身の人の作品が教科書に載っているんだ」と、なんだか誇らしく思った記憶があります。大中恩先生が「貝殻」に作曲されたのもその頃で、その頃の半田市民であれば知っていて、今でも歌えるのではないのでしょうか。うちにも眞理ヨシコさんが歌ったソノシートがありました。そのお話を後に大中先生にお伝え

した時、「親父の曲（同じく作曲家の大中寅二が渥美半島の事を題材にした「椰子の実」）には敵わないけどね」と笑っておられました。

中学に入ると半田小学校の子供達と一緒に、なんとなく、街の子はちがうなあと感じたこともあり。岩滑の子はたまた「岩滑原人」とからかわれたりしました。いまでは岩滑生まれであったことをとても幸せな偶然だと思つていて、その言葉さえも誇らしく思うのですが、南吉さんの作品にも街の子に対する戸惑いや、ひさしぶりに会ういとこへのなんとなく気恥ずかしい気持ち、学校を休んだあと久しぶりの登校時の気まずさなどが書かれていて、引込み思案だった私はとても共感しました。

のちに私は音楽を学ぶため東京の音楽大学に進学しましたが、ある時実家の本棚で、当時新美南吉記念館の館長だった矢口栄先生の『南吉の詩が語る世界』を見つけて、「こんなに素敵なお詩をたくさん書いていたのか！」と衝撃を受けました。「是非歌ってみたい！」と楽譜を探し始めましたが、残念なことにそう多くは見つかりませんでした。中でも「墓碑銘」はどうしても歌ってみたいだったので、作曲家の眞島圭さんにお願いをしてアンサンブル曲にしてもらい、東京二期会のリーベスリーダーというグループの定期演奏会で初演しました。二〇一三年の生誕百年は私の周りでは知らない人も多かったのですが、是非東京でもコンサートをやろうと仲間たちの力を借り、練

馬区ゆめりあホールにて「南吉の詩と文学が語る音楽」というコンサートを開催しました。後日その話を同窓会でしたら、同じく岩滑出身の幼なじみの M 君が「そのホールは僕が設計したんだよ」と言つてとても驚きました。

「ひとつの火」を読むとあの少年がまるで南吉さんのように感じられます。これからも南吉さんの灯した火を、歌でそのまま大切に後世に伝えるお手伝いができれば嬉しく思います。

執筆者プロフィール



東京音楽大学声楽専攻オペラ科卒業及び同大学研究科修了。没後 200 年記念国際モーツァルトコンクール派遣審査員会入選。中部読売新聞新人演奏会・現音秋の音楽展などに始まり、数々のオペラや

ミュージカルにも出演。同郷の南吉の詩や童謡を、音楽で広めるための活動にも取り組んでいる。現在、名古屋で劇団四季の「ノートルダムの鐘」に出演中。アメリカの歌研究会、日本声楽アカデミー会員、東京二期会会員。

南吉さんから常民さんへ

一月十日（木）、新美南吉記念館図書室で「久米常民宛 新美南吉書簡」寄託調印式を執り行いました。

今回東浦町から半田市へ寄託された六通の書簡（左写真）は、いずれも南吉が中学生時代の親友、久米常民さんに宛てたものです。

常民さんは大正二年五月、現在の知多郡東浦町藤江に生まれました。旧制半田中学で南吉と同級生になり、文学を志す仲間として親交を深めるとともに、勉学の面では良きライバルとなりました。戦後は教鞭を執りながら、万葉集に関する論文を積極的に発表。昭和五十二年六月、六十三歳で永眠しました。



そんな常民さんへ南吉が宛てた六通の書簡が見つかったのは、平成二十五年のことです。遺族から東浦町へ寄贈されていた、常民さんの蔵書や研究資料の中から発見されると、大きな反響を呼びました。それがこの度、資料保全のために記念館へと預けられることになったのです。

寄託調印式には、東浦町の恒川渉教育長と半田市の鈴木慶光教育長が出席し、寄託覚書に署名をされました。またその後の記念撮影には、記念館と東浦町図書館のキャラクターがそれぞれ駆けつけて、なごやかなムードを演出しました（右下写真）。



式では、他にも学芸員による解説を行ったほか、寄託された書簡の中から一通を、「南吉童話お話の会」で読んでみました。選んだのは、昭和六年四月二十五

日の手紙です。常民さんが進学した一方、小学校の代用教員として働き始め、同じように進学できなかった南吉の、辛い気持ちが続られていきます。それを同会の館山典昭さんが、一つ一つ語りかけるように朗読していききました。



彼岸花とふるさとに尽くした 榎原幸宏さん 逝く

一月十四日（月）、「矢勝川の環境を守る会」二代目会長の榎原幸宏さんが亡くなられました。七十八歳でした。

岩滑出身の幸宏さんは、故小栗大造さんが始めた矢勝川堤へ彼岸花を植える活動に平成八年から参加しました。小栗さんは著書で、「この『タボケ』老人を見て、『大造さん手伝いましょうか』と声をかけてくれたのが、榎原幸宏君である」（『悲願花物語・外』平成十三年）と当時をふり返り、「人生やっばり出会いである」と志を受け継ぐ後進の誕生を喜んでいきます。

一緒に毎日、草刈りや球根の植え替えに汗を流す一方、植栽体験の子もたちや社会貢献として草刈りをしてくれる企業の世話など、活動を対外的に広めていくことに熱心に取り組まれました。

また、NPO法人「ごんふるさとネットワーク」の代表理事を務めるなど、彼岸花に限らず、ふるさと活性化のために尽力。新美南吉記念館にとっても館と地域を繋いでくださる大切な方でした。

十七・十八日に半田市斎場で行われた通夜と告別式には約六百人が弔問に訪れ、幸宏さんとの別れを惜しみました。集まった香典の一部は、故人の生前の意思により、矢勝川の彼岸花植栽活動を含む新美南吉顕彰のために半田市へ寄付され、二十五日にご遺族から半田市長へ目録が手渡されました。

ご芳志に感謝申し上げますと共に、幸宏さんのご冥福を心よりお祈りいたします。

※タボケ＝何かに夢中になり、うつつを抜かしている意の方言。



凧、凧、あがれ！

一月五日(土)、「凧作り & 凧あげ体験」を開催しました。イベントには阿久比町「ごんぎつねクラブ」のみなさんが協力してください。凧作りと凧あげのコツを教えてくださいました。

参加した子どもたちは、好きな色のハッピーバード(凧)を選ぶと、瞬く間に組み上げへ。記念館の工作室で凧を完成させて、みんな近くの岩滑小学校のグラウンドへ移動してから、思い思いに凧あげを楽しみました(左写真)。

南吉が生きていた頃には盛んだった凧あげは、時折作品の中にも登場してきます。正月明けの空、曇天の中に、カラフルな鳥たちが浮かびあがりました。

記念館からのお知らせ

3月21日(木・祝)
10:00 ~ 12:00

雁宿ホール講堂
(半田市福祉文化会館)

貝殻忌 講演会

第 32 回新美南吉顕彰講演会

入場無料 / 予約不要
サイン会もあります
※要書籍購入、整理券あり

●演題 / 「人生に大切なことはすべて絵本から教わった」

絵本編集者として活躍し、皇后美智子様とも親交の深い末盛さんが、生きていくうえで児童文学から学ばれたことをお話しします。

●講師 / 末盛 千枝子 氏

【講師プロフィール】 1941年東京生まれ。慶應義塾大学卒。絵本出版の世界で編集者として活躍し、数々の賞を受賞。'88年に「すえもりブックス」を設立し、美智子さまのニューデリーでの講演録『橋をかける』などを出版した。2002年~'6年、国際児童図書評議会 (IBBY) の国際理事を務める。'10年に岩手県へ移住、下半身不随の長男と暮らしながら編集・講演・執筆活動を行う。翌年東日本大震災に遭い、「3.11 絵本プロジェクトいわて」を立ち上げ、被災地の子どもたちへ絵本を届ける活動にあたる。著書に『人生に大切なことはすべて絵本から教わった』(現代企画室)など多数。



榎原澄香(すみね)パーアート展

南吉童話を題材にした榎原澄香さんのパーアート作品展です。

会期 4月21日(日)まで
場所 記念館常設展示室
※観覧料(高校生以上 210円)が必要ですよ



以上の事業への問い合わせは新美南吉記念館まで
TEL 0569(26)4888

日誌抄

平成三十年十二月(師走)

▼8・9日 「えと人形をぬろう」。両日93名参加。

於半田市立博物館▼13日

中日新聞が第30回新美南吉

童話賞オマージュ部門大賞

受賞者、高木美月さんへの

インタビューを掲載▼21日

空調機器全面更新及び照明

改修工事に伴う臨時休館終

了▼22日 「手ぶくろを買

いに」の日」イベント(1

月6日)。380名参加

▼23日 第161回読書

会。19名参加▼25日 ミュ

ジウムトーク。6名参加

平成三十一年一月(睦月)

▼4日 新美南吉読書感想

画コンクールの受賞作品を

展示(2月3日)▼同日

ミュージアムトーク。13名

参加▼5日 「凧作り&凧

あげ体験」。16名参加▼10

日 「久米常民宛新美南吉

書簡」寄託調印式。於新美

南吉記念館図書室▼13日

ミュージアムトーク。10名

参加▼16日 中日新聞が

故・榎原幸宏さんの記事を

掲載▼19日 朝日新聞土曜

別刷版「be」の「みちもの

がたり」が南吉を特集▼25

日 ミュージアムトーク。

8名参加▼27日 第162

回読書会。18名参加

(3月の休館日)

4日(月)、11日(月)、

12日(火)、18日(月)、

25日(月)

(4月の休館日)

1日(月)、8日(月)、

9日(火)、15日(月)、

22日(月)

新美南吉没後76年

貝殻忌



3月21日～24日

※22日(金)は南吉記念館を無料開放

お問い合わせは新美南吉記念館まで
Tel 0569-26-4888

3月22日、新美南吉は76回目の命日を迎えます。
菜の花が咲く春のお彼岸頃に、みんなで南吉を偲びましょう。



▲献花

貝殻忌式典

3月22日(金)

AMI南吉を歌う
～貝殻忌を偲んで～
音楽料理人ユニットAMI
が、南吉の詩にオリジナル曲を
つけた南吉童謡を奏でます。
時間 14時～15時
場所 記念館図書室
出演 林美津栄、横井敦志

3月21日(木・祝)

貝殻忌講演会「人生に大切なこ
とはすべて絵本から教わった」
※詳細は5頁を参照

貝殻笛づくり

南吉の詩「貝殻」に詠われた
貝殻笛を作ります。
時間 13時30分～15時
場所 記念館工作室
参加費 無料(申込み不要)

時間 10時30分～11時15分
場所 記念館エントランス
内容 朗読(南吉童謡お話の会
でんでんむし)、うた(つばさ
幼稚園)、献花など

南吉童謡の紙芝居

時間 11時30分～12時
場所 記念館図書室
出演 南吉童謡お話の会
でんでんむし

蓄音機コンサート

南吉も聴いた蓄音機でSPレ
コードをお楽しみください。
時間 13時30分～14時
場所 記念館図書室

3月23日(土)

貝殻忌ウォーク

～ガイドと歩く文学散歩～
ボランティアガイドの案内で
南吉のふるさとを歩きます。
時間 10時5分集合、12時解散
行程 名鉄半田口駅集合↓南吉
生家↓岩滑八幡社↓はなれの家
跡↓常福院↓光蓮寺↓岩滑小学
校↓矢勝川堤↓南吉記念館解散
定員 15名(申込み順)
対象 どなたでも(小学生以下
は保護者同伴)
参加費 無料
申込み 電話又は直接窓口へ

蓄音機コンサート

南吉も聴いた蓄音機でSPレ
コードをお楽しみください。
時間 10時30分～11時
場所 記念館図書室

「子どものとなり」

貝殻忌朗読コンサート



南吉作品を歌と朗読で表現し
たコンサートです。
時間 13時30分～15時
場所 記念館図書室
出演 のさきのりこ、マンボウ

3月24日(日)

南吉講談席

『良寛物語 手毬と鉢の子』
『新美南吉』より「敵討の話」
ほか、「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)
などを講談で語ります。
時間 11時～12時30分
場所 記念館図書室
出演 洋子・小りす
(講談を聴く会)

歌とお話の会

南吉オリジナルソングと南吉
童謡のストーリーテリングです。
時間 13時30分～14時
場所 記念館図書室
出演 小野敬子、左近治樹・玲子

南吉読書会(自由参加回)

南吉作品を読み、みんなで楽
しく意見や感想を交換します。
時間 14時～16時
場所 記念館会議室
対象作品 「嘘」

3月23日・24日



各種ワークショップ
(GON-ART ほか)

全日開催のイベント

南吉クイズ

問題用紙を受け取って回答し
よう。全問正解でプレゼント!
時間 9時30分～17時
場所 記念館受付
※プレゼントは各日100名まで